

JSIR NEWS LETTER

国際リハビリテーション研究会

vol.26 2025年1月28日発行



巻頭言

2025年を迎えて

川野晃裕（国際リハビリテーション研究会事務局、
リニエ訪問看護ステーションキッズ世田谷）

〔巻頭言〕

2025年を迎えて

川野晃裕

〔特集：第8回学術大会〕

高橋恵里

伊東秀晃

橋本大吾

成田徹平

〔コラム〕

『世界のめがね』

『キルギスの病院で再び臨床の現場へ』

石井清志

〔お知らせ〕

新しい年を迎え、皆さまいかがお過ごしでしょうか。

私は2018年秋から約1年半、JICA海外協力隊としてウズベキスタンで活動し、現在は当会の学会や国際リハカフェの運営に関わっています。本ニュースレターでは、新年にあたり私自身の抱負をお話させていただきます。

気づけば、COVID-19のパンデミックから5年が経過しました。この数年間、世界の情勢だけでなく、医療や国際協力の現場は変化と適応を迫られる時代を経験してきました。オンラインツールの普及により、新たな可能性や交友関係が広がった一方、個人的には対面交流の価値を改めて実感する機会となりました。昨年を振り返ると、スポーツ界では大谷翔平選手がMVPを受賞し大活躍したことはご存じかと思います。大谷選手は以前インタビューで「無駄な試合や練習はない」「成功するとか失敗するとか僕には関係ない。それをやってみることのほうが大事」という自身の考えを発信していました。この言葉には、自分の可能性を信じて新しいことに挑戦し、失敗や苦労をプラスに変える姿勢が込められており、私も深く共感しています。

この数年間の経験は一見遠回りに感じることもありましたが、新たな挑戦へとつながる大切な学びがあったと感じています。この経験を糧に、2025年も『自分が納得できる一年』にしていきたいと思います。本年も当会の発展と皆さまのご活躍を心より祈念いたします。

特集：国際リハビリテーション研究会第8回学術大会 『国際リハビリテーションにおける地域共創 ～海外と国内の経験を共有しよう～』

海外での活動と国内地方での活動の双方向活用

高橋恵里 大会長（福島県立医科大学）

2024年11月17日（日）に、当研究会第8回学術大会がいろどりの丘（宮城県東松島市）とオンラインのハイブリッド形式で開催されました。

テーマは「国際リハビリテーションにおける地域共創～海外と国内の経験を共有しよう～」であり、中低所得国と国内の特に地方における支援に役立つ知識や技術の双方向活用について2つのシンポジウム、2つの特別セッションが組み込まれました。また、一般演題発表もありました。さらには、学会前日にサイドイベント・スタディーツアーとして石巻市の北上地区・雄勝地区を訪ね、東日本大震災後の取り組みを視察しました。



〔高橋恵里 大会長〕



【学会ポスター】

当日の参加者は、オンサイト、オンライン、講師を合わせて39名でした。また、スタディーツアーには9名の参加が、オンラインで開催した2回の事前企画には延べ48名の参加申込があり、全ての企画の延べ参加者数は96名となりました。シンポジウムや特別セッションでは、中低所得国および国内の地方のように社会資源や働き手が少ない地域において、支援者がコミュニティに入り活動を展開する方法や社会的交流を生み出す方法に共通点が多くあることが議論されました。

私たちは、日本を出て他の異文化に飛び込むことで大きな違いに遭遇し、社会・地域・人の生活を捉える必要性を強く認識してきました。一方で、国内においても、地域での活動は施設内と比較して多様性に富み、様々な配慮や連携を必要とします。そのような経験が相互に役立ち、世界中のどこでも地域における活動を

上手く展開する助けになると感じました。国際リハビリテーションと地域リハビリテーションは、非常に類似点の多い領域であることを再確認しました。今回の交流や議論にご参加いただいた皆様のこれからの活動の一助となることを期待します。

『待ったなしの課題を解決する糸口は、世界中の仲間との“共有”から見えてくる』

伊東 秀晃 (いろどりの丘)

皆様、昨年の第8回学術大会では、大変お世話になりました。「国際リハビリテーションにおける地域共創～海外と国内の経験を共有しよう～」というテーマの中、国際リハビリテーションと地域リハビリテーションの親和性が改めて共有され、私としては、活動拠点としている宮城県東松島市（人口約3万7千人）と対比しながら、アフリカのマリ共和国など話題に挙げた各国・各地域の実情と、課題感や考え方を学ぶことができました。

さて、2025年は団塊の世代が75歳以上を迎える「2025年問題」と言われてきましたが、あっという間にその時が



【伊藤秀晃 氏】

来ました。2024年の年間出生数が70万人を下回るとされていますが、私が生まれた1980年代は、年間約120万人～150万人、ピークの1973年には約209万人。一見、減少幅のインパクトが大きく見えますが、これ自体は「わかっていたこと」でもあるかと思います。「2025年・2040年・2050年」と問題ばかりで暇がないわけですが、ちなみに2050年の総人口は約1億人となる見込みで、総人口の約40%が65歳以上、生産年齢人口は約51%になる見込みと言われています。あらゆる社会構造の更新が求められ、「若年者が高齢者を支える構造」もまた成り立ちません。

世界的な潮流となった少子高齢化ですが、海外では一層スケールの大きい問題が待ち受けている国もあります。「2050年なら、あと四半世紀も・・・」などと悠長なことは言うていられず、あの「2000年問題」からの時の流れと同じと思うと、きっとあっという間でしよう。しかし、これも「わかっていること」だとすると、新年早々、「お先真っ暗だね」と言っている場合ではありません。私たちや子どもたちの世代が、よりよく生きることができる共存社会を創造することが、この時代を生きる私たちに与えられた課題なのだと思います。

最後に、世界中の仲間との多角的な情報や活動の共有と、それぞれの場での変化が求められる中、私たち「いろどりの丘」は、先の学術大会でもご紹介させて頂いた「ブルーゾーン」の叢智を学び、人や自然、社会とのつながりが保持された自立的で健康長寿なコミュニティづくりとそのモデリングを行い、他の人口減少期にある地域や被災地、或いは、諸国に対する汎用性を持つことが、社会が迎える局面において役立つことを信じて、これからも活動をしていく所存です。

社会のあり方に対するアプローチを考える

橋本 大吾（一般社団法人りぷらす）

2024年11月16日午後、国際リハビリテーション研究会学術大会のサイドイベントとして、スタディーツアーを開催しました。震災から13年を迎えた被災地の現状と地域の取り組みを学びました。今回は、当日の様子の一部を皆さんに紹介させていただきます。



【イシノマキファーム代表高橋由佳さんの講義様子】



【旧石巻市立雄勝病院慰霊碑の様子】

東日本大震災以降、石巻市北上地区に拠点を構え、ソーシャルファームやホップの栽培、クラフトビールの製造、販売などを通して、多様な方が働ける社会を様々な組織、団体と協働しています。今回のツアーでは、リハビリテーションの目標の1つとなる「就労」について多角的に学ぶ事が出来ました。例えば、一般就労や障害者雇用に加え、「中間的就労」と呼ばれる一般就労へのステップとしての働き方や、短期間農業に携われる農村留学プログラムなど、私たちの職場でも参考になる実践例が多く紹介されました。

この場所は、海がとても近く震災時には3階建ての雄勝病院がありました。しかし、病院の高さを遥かに超える津波が押し寄せ、多くの命が奪われました。震災以降、日本では防災・減災の取り組みが進み、介護施設では2024年以降、医療施設では2017年以降、事業継続計画（BCP）が義務化されています。職場や活動エリアの立地やハザードマップの確認が重要であることを改めて実感しました。

「多様な働き方の実現」や「防災・減災」も個人への支援だけでは限界があります。代表の河野先生が学会の最後に言われていたように、私たちは社会のあり方に対するアプローチをしていく必要性を強く感じる機会となりました。ぜひ、関心ある方いらっしゃれば石巻市に遊びにいらしてください！タイミング合えば、喜んでご案内させていただきます！



【参加者の集合写真（雄勝にて）】



国際リハビリテーション研究会 学術大会
サイドイベントスタディーツアー
～東日本大震災から13年、被災地の今と現地の取り組みを共に学ぼう～

日時 2024年11月16日(土)
12:30 石巻駅
13:15 イシノマキファーム
14:30 大川小学校
15:30 旧雄勝病院
17:00 石巻市立町商店街
18:00 石巻駅

イシノマキファーム代表理事 高橋由佳 氏
農業を通じた共生社会と経済支援を行う
「イシノマキファーム」を通じて社会に貢献
（次産業による商品開発や就労者支援を行う、
iSノブテックファーム㈱、直島農業振興協会）
石巻市立町商店街 シズカニキエティカ
の2Fホール

参加費：5000円(学生：2000円)
参加費はレンタカー、ガソリン代
旅館宿泊費に含めていただきます
定員：15名(定員超過不可) 参加申込締切：10月31日(木)

申込はURLから
<https://forms.gle/9mYpYD9G0R8b>
国際リハビリテーション研究会 第8回 学術大会(学術大会HPはこちら)
11月17日(日) いろりの丘(宮城県東松島市)

宮城県理学療法士会 国際交流・支援等委員会の取り組み

成田 徹平（宮城県理学療法士会、東北大学病院）

今回私は宮城県理学療法士会 国際交流・支援等委員会の一員として「これまでの活動と今後の展望」を発表させていただきました。当委員会は、地域と国際社会を結ぶ架け橋として、活動を続けています。2021年の設立以来、地域社会との連携を強化しながら、「異文化理解」と「国際社会への貢献」を目指し、多様な活動を展開してきました。

特に2023年には「整形外科・スポーツ理学療法の実践と研究留学」に関するセミナーを開催しました。このセミナーでは、参加者が国際的なキャリアの新たな可能性を発見し、さらなる挑戦への意欲を深めました。実践的な知識と経験が共有される中で、理学療法士としての国際的な役割の重要性が再認識されました。

本学会では、「地域共創」をテーマに、国内外の災害支援の経験が共有されておりました。宮城県内での東日本大震災後の取り組みが紹介され、地域社会との連携の重要性が強調されました。特に、中低所得国との比較を通じて、異なる地域の課題と解決策を学ぶ貴重な機会となりました。これにより、支援活動に対する新たな視点を得ることができ、地域社会と国際社会の両方に貢献する取り組みの意義が深まりました。

これまでの経験を活かし、今後も新たな挑戦を続けていく予定です。理学療法士としての可能性を広げ、多くの方々と共に成長し、新しい可能性を追求していきます。委員会は、引き続き国際的なネットワークを広げ、地域社会と連携しながら、理学療法士の国際的な活躍を支援し続けていく予定です。この取り組みが、理学療法士としての新しい道を切り開ききっかけとなることを願っています。



【成田徹平氏】

特別写真：国際リハビリテーション研究会第8回学術大会



【開催会場：いろどりの丘】



【メインシンポジウム1】



【メインシンポジウム2】



【学会集合写真】



【閉会挨拶 河野眞代表】

世界中で活躍を展開している
会員のめがねを通した
世界の姿を各号お届けします。
今回は、**キルギス**からです。

現在、私は中央アジアのキルギス・ビシュケクの病院でリハビリテーション部門のコンサルタントとして働いています。キルギスを含む中央アジアでは、非感染性疾患が増加する一方、現地のリハビリテーション医療関連の施設や人材が十分ではなく、10日程度の短期間の入院後に在宅療養を余儀なくされる患者さんが多いのが現状です。

近年、キルギスでもリハビリテーションの重要性が認識され始め、日本の個別評価に基づくアプローチは高く評価されています。臨床場面でも評価結果を基にしたリスク管理と個別介入により、長期間寝たきりだった患者さんが歩行器で退院し患者さんやそのご家族に大変喜んで頂きました。日本では当たり前のリハビリテーションですが、海外ではさらに価値ある知識/技術であること、そして、リハビリテーション専門職は国や地域に関わらず、人のために役立つ本当に素晴らしい専門職であることを、私自身あらためて実感しています。

中央アジアでの生活はイスラム文化や旧ソ連の影響が混在する独特の環境であり、患者さんや家族、スタッフとの交流を通じ多く事を学ぶこともできています。これからも日本の医療技術を伝え、現地のリハビリテーション医療の発展に貢献したいと思います。



【キルギスの病院でのベッドサイドでの評価の様子】

【お知らせ】

【国際リハビリテーション学第7巻郵送予定】

2024年2月から3月にかけて会員の皆様全員に「国際リハビリテーション学第7巻」を冊子体で郵送いたします。未着の方は事務局までご連絡ください。

【年会費お支払いのお願い】

2024年度の年会費のお支払いがお済みでない方は、下記の口座まで年会費のご入金をお願いいたします。銀行名：ゆうちょ銀行 口座名義：国際リハビリテーション研究会 記号：10540 番号：83410731
他金融機関から振り込む場合 店名：05八（ゼロゴハチ） 店番：058 預金種目：普通預金口座番号：8341073
※振込者名と会員名を同じにしてください。

編集後記

- 今回の学会は、各々の発表者が地域で実践している活動を改めて振り返ることで新たな視点で自分自身の活動を評価されていたことが印象的でした。私自身の活動を振り返るきっかけになりました。（長田真弥）
- 今回取り上げた学会報告では、海外での経験や知見を活かした“国内での取り組み”が数多く紹介されています。国際協力や地域開発に関心を寄せる皆様にとって、多くの学びや課題解決のヒントが得られる内容となっています。今年も引き続き、有益で充実した情報をお届けし、皆様とともに知見を広げていければ幸いです。（大西海斗）

事務局 編集担当

大西 海斗（コーエイリサーチ&コンサルティング）
長田 真弥（姉ヶ崎ヶアセンター）
高橋 恵里（福島県立医科大学保健科学部）

高橋 佳太郎（JICA海外協力隊、チリ派遣）
古川 雅一（仙台医健・スポーツ専門学校）
三田村 徳（東北医科薬科大学病院）

【研究会HP】 <https://int-rehabil.jp/>

【お問い合わせ】 国際リハビリテーション研究会事務局
jsir.office@int-rehabil.jp

JSIR HP

